

手力雄神社

鎮座値 岐阜県岐阜市蔵前 6 丁目 8 番の 2 号

連絡先 岐阜観光コンベンション協会 058-263-7291

旧地名 美濃国厚見郡長森郷蔵前字比奈

天岩戸神話

三尊神とよばれる天照坐皇大神・月読命・須佐之男命がそれぞれ高天原・夜の国・海の国を統治するよう命じられた中で、須佐之男命だけが海を治めるのを嫌がり、母の国に行きたいと泣き喚きになられた。父の伊邪那岐命は追放を申し渡されたが、追放される前に妹に別れを告げたいと高天原へと登られた。天安河の宇気比があり、天上界に受け入れられた須佐之男はそれをよいことに阿離ち・溝埋め・屎麻理・登許曾のあげく天の斑馬を服屋の棟から投げ込み服織り姫を殺してしまった。天照坐皇大神は自分が宇気比に破れたことから弟の須佐之男が天津罪を重ねるのを見かねて天岩戸を閉めて刺籠もりになった。

800 万の神々が天安河原に集まり相談した時、高御産巢日神の子思金神に計画させ、その孫の伊斯許理度賣命に鏡を作らせ、思金の子天手力雄神を岩戸の脇に隠れ立たせ、天宇受賣命が桶を伏せてその上で神懸かりになって踊られた。800 万の神々が一斉に笑った時、天照坐皇大神は不審に思われて岩戸を細く明け、何かとお尋ねになった。天宇受賣命は「貴女より尊い神が現れたたのです」と答え、天児屋命(中臣氏の祖神)が鏡を差し出した時、天照坐皇大神は不審に思っ岩戸から少し進み始められた。天手力雄神は、その手を執って引き出し申し上げ、同時に布刀玉命(忌部氏の祖神)が注連縄をその後ろに引渡し、もう天照坐皇大神はお戻りになれず、天上界も地上も平常に復し、須佐之男命は手足の爪を剥がれ、ひげを切られ出雲の国に追放された。八岐大蛇を退治し天叢雲剣を手に入れられ、大国主神の祖先となられる。(古事記より)

伊勢の神宮はご正宮に天照坐皇大神をお祀りしているのは有名だが、相殿の神が二柱いらっしゃることは余り有名ではない。東に天手力雄神、御神体は弓と言われる。西に万幡豊秋姫命である。御神体は剣と言われる。

那加手力雄神社と長森手力雄神社

岐阜には東山道が通っている。この道を信州戸隠の修験者が都と信濃を行き来し、情報・文化を伝播したと言われている。

戸隠の九頭竜神が天手力雄の神を迎えて奥社とし、中社には思兼命を祀る。天手力雄神の身体は籠であり、祈りによって降雨を給うという。那加手力雄神社は各務郡更木郷の総社である。各務郡は芥見を含み、東山道の影響を直接受ける地域である。もともと真幣明神(みてぐらみょうじん)と申し上げて日本でも最も古い形態の神社の一つであるが、早い時代 文安二年(1445 年)に手力神社を名乗り、籠の彫刻や民話があるのも戸隠信仰の影響下にあると考えられる。

長森は人皇第 95 代花園天皇(在位 1321 ~ 1330)が皇室領を京都大徳寺に奇進したという。人皇第 96 代は後醍醐天皇でこの方も大徳寺を祈願所として尊崇された。足利尊氏や、楠正成の活躍する少し前のことです。

貞観 2 年(860 年)頃美濃の国府は不破にあり、物部氏が勢力をふるっていましたが、各務郡には村国男依がいて、壬申の乱を天武方の勝利に導いた。やがて村国氏の勢力が衰退すると、各務氏が勢力を伸長し、各務の大領各務吉雄・厚見の大領各務吉宗が貞観 8 年尾張の農民が国司の承認のもと広野川(現在の境川・木曾川の本流)の流路変更の工事をしていたのを 700 名程で襲撃し、死者を出したと三代実録にあります。だから、各務郡の氏神の手力雄神社を厚見郡に祀ったのだ。とする考えも出るのでありますが、厚見郡の中心は茜部・鶉で、荒田川の東から新加納の丘陵部までは湿地が多く、皇室領(屯倉)として一種の空白地帯でした。各務吉宗が祀ったのは石切神社で、各務氏の祖神石凝姥命を祀っています。長森の手力雄神社は宮中の祭神を分祀したものと考えられ、伊勢の神宮の手力雄神と同神だと考えられます。龍神信仰は無いこと。円城寺村の雨乞いは天保 3 年が始まりであることから戸隠信仰とは別の神社である。昭和 56 年は早天続きであったが、円城寺の雨乞いの後夕刻から降雨があった。